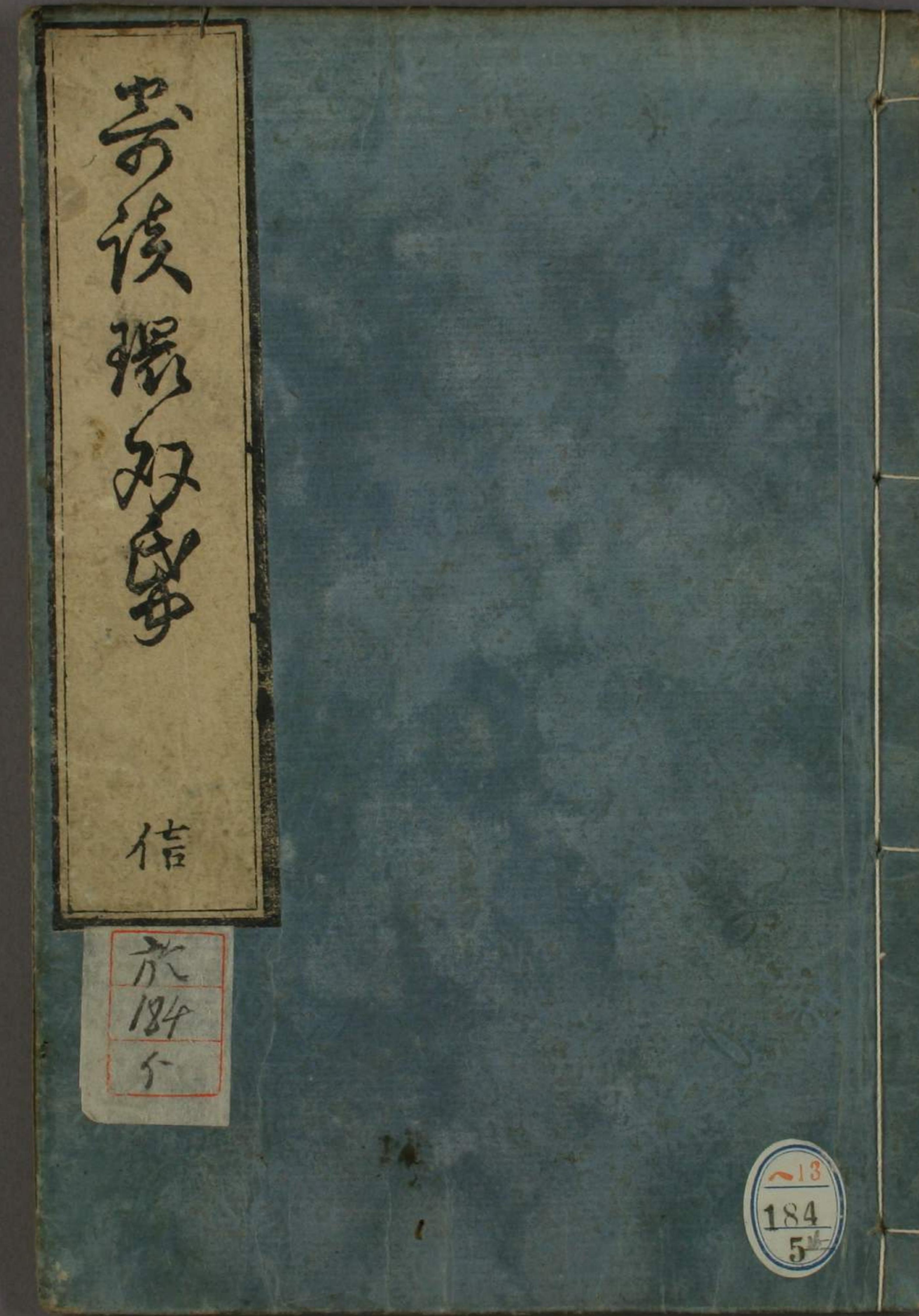
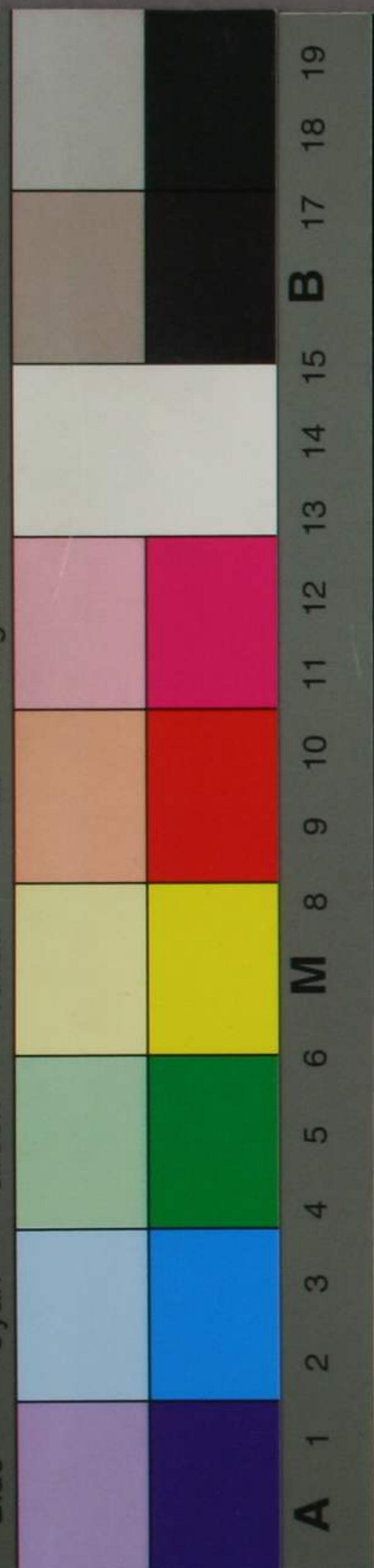


**Kodak**  
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

**KODAK Color Control Patches**

Centimetres



1845



きどんじゆきどんじゆ  
寄余五臣早紙承み

名也

ひ宿せりやんとひちう候へゆうて居うてね乃とく  
とあらむ栗の飯まひせく飴をまひね風をすき  
衣修あまやまひせん候の夜とあられに極寒せ  
鋸の木を伐火よまくまくまく寒を凌うせま  
せはく森をぬ候か人乃変衰の木の次の木  
雪の壳の下くうりまくまく候若の候なりまく  
つまらて候あはかくおぬれされと豫食乃とく  
海ふるひあるよあとお宿へくるゝ彼修乃あはき  
山方よそや哨くんじ裏あよ乃ふ御あると豫食  
家を召めらまくらるる者をまく豫食せど承

のた闇門源のゆ茶と一處よあらへる云葉のまくへ  
まくすて馳參ると神妙ふと居スツモヤ乃入雪小  
候行者よ宿をまくせ候候す一候の木候候大は候  
あそし志をゆくこんどもひあきくまくがんぐ年うよ  
の広と境へあらうとまく強く立むとお邊あく  
ふく月季の咲をゆんどん雨潔あひくれへ人のつる目も  
おとほまく西日ありふみてゆくと候の肩と寄き  
奉ゆへ立候ヨリ理本のやまと花とくとくとくとく  
ぐみを有ふて夫うり家富きと承ひとありとくとく  
王に奥底へ學問よ長いたれべ篠倉へのまくへとく

つよくす人れ母へくそきくたるべくくば色月よりうて示し  
常あく事もまだ多もまづ秋をすくあべる行が是處へ  
くるくと思ひ立武藏。秋月城えんとく八月十日余つみ  
四まを立あたう冬の月にて余がづくニ五月中  
の新月のえ二千足乃外をてに鷹くうてわを鷹狩  
すと翁騎とくこのびうらもあたは景とゆく強きいり  
がくよのむちうなとえくはのあはくまくゆくるよ儀」  
怨の声を拂はうちとをぞスハ衰をほく夜もく  
更これへ翁とて翁も月を薄んとくくまう葉の  
所邊りとあらがきふ衣揚膏をとくよとくあらえま

ある家の熱つゝとあよ冬門のうら株のかまひあくまを  
ハあれぬ往の送りこそがモつせまかせやうふと貢ぐよ  
彼もぬきぬば新末の月下の門を仰げとぞ答へば武藏  
九月三十とそろぐ来るわのあら月のあよへくまを  
絆ぐ赤をほんとかわらるるの人らあらざとて絆せ  
とも今うよ月乃達後もとおぬうくへ新端のこゑをかう  
熱つへ經のそれく帰るぞ東乃小門へ廻りまくよその  
ナナ後三と内へアタクね小門のこゑへとくとくあよ  
あよくうあら家をこまよしあるのふと離石

ほしのひめのそとん二人をよきとお組く立あくアヌ  
シセキと内へ体へくやさくわとあくたるうそゆと年  
のときかとあくさがヤセうや、クシ、至グンズルトマツ  
せんじゆどみあらうひくはれハ内湯御をくとことともうへ  
御殿うちゆも年のみうるんぞうとくもよくいはく  
おまう年の齢二十斗とアラタタニテカヨジキサ房  
久あずくと肩のあくろをはるどあらる坂支うりきどし  
の女房めのそとん福ふく翁すまくぎくとくのとくくよ  
おちくはくちあくらや、あくくあく、の齢又十金と  
えあくらううふせは本あらう姿とうる乃勝ねく

アタタカヒれ袴キモ着ヤド白韁革を手ふぢくゆうく  
と立出門のまへまゆく底の面震ぬ同人も多に駆ざく  
乃まくへくととゆくひもひとれ他物のおあれなり  
日をあらめく者今のお給をヤトウシトム今ヨヘア  
志と有我ハヤ一樹の新よ高ヨアヒレ一派を経ても  
他生の縁とゆれハ今宵のゆどアモ契あきかぬ少く  
まくらへ一傷の四向キモ形半分すとてお佛事へ  
タチねづれと支と志んと佛壇どまくハ余のものハシヨ  
あくくそーく彩繪タガ女の姿の一軸ヒタナラヌ内ハアヌ  
走き立ち人ひとあまれようればちかに云まきや待従

絵をうことぞあうなり其うへ乃は名妻院常照とある  
「う是と云て詠歌西時名るミス姫の絵舟と  
ゆらきとく又は名乃文字よりもいふも少ぬてのは  
是と云故のあるやうんとて舟称されば不審へかうそく  
しすれをばうぐくよまひせんくわくれ衣ときう  
ゑされり舟某年あふ女乃舟をば一人もしては船母  
のうきう舟拙き舟よや思ひぬ外の不思儀うそせうと  
まかせく我おもたよとぞくとよせんくあうれへよても  
あうきう舟出とすあうれへうだままでうまく時人歎  
とある船と繋一とあう一うまくあぬ船とあると

女のあ辰りよりてふ女心の隠すまことあうんうと義  
へ深くうみゆく一全かくほりくへようれくひがひゆ  
あうる老の娘か袖まのねそりてよ一者のもとえひれよ  
ふと微して波高ひうとけ手筋の求く母とちうる  
うのそとむの歎をあうくうむる母へ。うぢと一年をとく  
あうみれしよとあうてうぬうううううううううう  
あうみれしよとあうてうぬううううううううううう  
うとくのうをくくくく闊くよとて舟ねりれとよせ  
うとくのうをくくくく闊くよとて舟ねりれとよせ  
あうみれしよとあうてうぬううううううううううう

人のすゝめをうなごとのはまで不用あまくおよぬきの篠倉へ  
よしー附れ寝の布うへと初くみくみが其はをひふ寝  
思とやとゆりー其は寝とあくこめつると音くく寝み  
持あく丈よたぬをまくせんまくとまく多あくとこくふとも  
あられ又墓地の佛のむ袋を照女とやててもあらて波甚要  
岩とまくー人も空ーくあくとすと寛ゆるまの波よ  
みをアラハ内かーとすとひふ波よ春常なめ海あら人  
あらあら体が重をな波佛あんねばらの久と寝と歌く波  
其は寝よ歌歌を照とほ名をあくたまをなうば給海へ  
簾食去度よりへーり照女うふさみ歌よ余うよく歌く

仕事不變ての是をアソ活まねすと歎かくくいじやうりゆ  
うと老かず不定のきくなれば年の若ととめむまうと  
あら体どもみそへミね生たまく色志より裏する歌の残る  
歌うりまとのあらぎたやと波をませく歌うよ食うまうと  
是をせでうちうあらうめぐらくて今宵此はすとくまうと  
アソふ裏あれ其は抱緒の裏うそそゑうと仕うぞとよドテ  
ううやざんあらぎとあらぎ某うとあるととあるうる女乃  
名を環とて然がせとんびちのものとねが某うと環うて  
送うー夜の簾うと然うの懷よめしよ細れーとせうみま  
うくの匂まき暮のあらうー附小年六とよてひまみの

あまめやうへとくみきをまどり出やうと遅ゆのかう  
事るぬ女のうちへ彼文或へまくら夜あどをなづけの心  
と近ゆの看だみされをまどひゆると巡礼といふて  
女房の病よ瘡たるをゆまれそとの心うひうら夜をまどへ  
此みを抱うりてあもかせんとぞれをも懷へりきみとが  
至巡礼と坐させとぞありのを女とおはくまほゆ  
系へ環が室へくなりとむらまく埋へせ邊よ一表とゆう  
意に回向をしていふよ再びとゆきよ遠うればねと金紙の  
へまとかひへうにまつとあじるやとある角れゆう  
さゑえとひまふとよく有りゆやひくようふをせしゆう

教多一とくども我半身ア力あくまひアキためーがゆく  
紫ゆれば安マガリ二人乃よの一人ハ半引の腰のれく月を  
あり一人ハ道の人の手とあう方とみゆあうとのむくびぞ  
逆のこにあとも小然へれの松くと緒くわらせん松半  
糸の腰よりひーふのみの半身れきくとよばこの徳宗アモ  
山神をまー小社のひうの人の集アモ神ふ乃神半のひう  
物スミ半りのよ下をかくねそそくませぐざくるとの道へ日と  
名古ふ碑記人の國淨を記へる力をぬきまへてあるまつる  
たとくやまのあつた大勢み人地のへりあれへ我一食とす  
かうんとさうぐ役よまとまつるふを抜抜して跡もあら



王氏系之

親とあひひへはうすよみ繕ひすとほりあへてく事はあらうか  
ふへきり書ひるのとておへたまうじへる、ゆきかくをやさ  
ゆかなる其の餘物は私有を家人の内房が嫁よねあらむ  
門へ居てうとせへようもむよなれのとさりあへて宣ひはく  
ゆゑもゆゑあへて居る川端へ女は事とてどあれよあれよと  
ゆきれどりあう人あるへあうてえよんともうとくまぬ  
だふまのあへるよは居みのまほぐに方れ村雲はれまくべ  
けどもく内勝よくばげれべやめてへんきもあうとくえよ  
くじせの姿を今一と因みにくやしけいふ頃とむせ千ちの  
庵をすゞらせと毎朝おとづるはあたたぢりうら

紫花とゆせんとすもむ林あるあらるくの女房を其  
生れあくびさんへうぐりとえととめくと照女がまとゆ  
あくせは名をゆて夏夜うかく思ひあくとぞやゑみくよ  
月の世よもすれびとたふ乃伊庵とそねどもわすれ  
どもだんとそれどもものはほどあんせの道やどか  
ゆゑあるゆてあくわせはをうべ一面さしれ人みゆると  
あらう其きあくたえ今なりの活うびもあた親ふあんと  
思ひされば二へよつ相照させの君仕従よと仕とゆふる  
たくらみと思ひ侍り一又母うへ乃侍従みゆく居のよにり  
こも思ひあくまことのあらうごやかももあんれ芸何をう

ほみまくせん某へ上等の佐野のたまく何がよふ太郎某  
ヒヤウのうそべの絵姿乃侍従と實めくとて隠りあれる  
とそそり我故み将君の家とあつてうへ従長者とそそり  
人ふ毫毛せられ今へゆく小お後我妻とせんとおうへく  
あれまくせ一歳の白雲山まごとびとてうのうがる  
のゆとそそれよとせあくひ思ひ半えまへ極もまく一ゆね  
のゆとふせよ便あまよとれいわらわらわらわらわら  
時四うみのゆとよがうのゆひくや大なる川へと下し  
ゆくるゆくやうよがうのゆくあり母のゆくはれわら  
きわんとやせふめのうの女房へはるゑやんと坐

かくよしと養の精よりてこゆとおまう女のりとへ  
はまゆをめのとすもあせびとへるふよどてあらう  
うせよ親とアリのれかヨマテあらう遙かにせとうと  
シムる神の命りあく事とともすあらん其財のうれ  
一たかひあうとさかくらうとおほひてへ続もゆく  
思ひきよまや人窮さればとよめとよまうと  
やややんよのけ名をあらぬとあるみせたぐくの名  
とあくとよあくとあくとばとづねまくせん便とあくと  
よまくとも竟くとあくと称ばりがを何ととづねだやう  
もあくと中よもがーあがへくとあらうへゆうのよ

まとうとほうあぐき川そむへまじとあらうと  
かよあきとがまぐことほりうとほりうとほりう  
まくとよの人のたまへきやあやよく一里までわらう  
腰のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
とふ思ひとまくとまくとまくとまくとまくと  
霄へ念佛やつひととよ聖危の来延とと預りとよと  
らぬ方れあ出みと女が再生をとつとみの廣とよと  
あおと人あと人あと人あと人あと人あと人あと人  
みうきとまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
せあととあととあととあととあととあととあと

かくに又母をゆふもてへとれぬとう歩くもタモトふへ  
足後よ犯をへんきよとのゆくをながとあまびよるがもへ  
長なが能時りあたしての後ひ一人は是やと歌ふの中とあ  
それよりのうととよろこびよとくゆ今へ一朝もとづく  
鎌倉よ登るねのそくみくまんは身とおととへ憚  
もりへども秦とも昔より此ふよ代くお侍入間の郡司うじゆ  
と鎌倉の大名小名のば道のよがうらの不領ふりょうと頼  
支配す。りのけねばさの三賤みせん一さりのまわゆくゆたもが  
ち環わきくりほー者しやくととみは後ぜよとまよろも旅の用を  
ともすとて

## 九度乃益の車

院いんノ夫婦めおとへいせき鎌倉かまくらへむとひ筋の筋ヒリトモと侍従ぢどう  
對面おもてへるふいゆく御ごもふどもつまねども名前なまえへるふ  
十す後ごたよしきせし我がひの仰あおる夫おとことあく彼かれとよある人  
あくねあくねと袖そでと顎あごよおよおくこめぐとあたな姫ひめ  
さの金かなよま郡ぐんノ夫婦めおとを物ものをを得とく二人ふたりと侍従ぢどう  
う左右うしゆのふとくらとゆびのうと引ひきをくわなくくら外ほか  
ふくうくう昔むかし一うち子こをとび称めいく廻まわくおの守刀まつわざあくハ書  
傳つたすわふどもくふ名なのうもくらとくふひ多多くれども  
一トとをいふたとてありたるゆアととめーなく貰うれ

かく是といふ私子の名前がなれども他人の目より  
めぐくの心より夫ともいわくおうとうへありへねば侍従  
を買ふゝゝと小紋の宝と送ふそりら大福長者へ贈  
の事と頼むる所の名前をゆふあらしめられたるはすある  
く侍従が是をこそとあく神妙よほへんべとくく  
は眼ゝぬりう親子三人ナツルを收ひりそんぞ四里を  
えうたる去程ふかはるへ日をゑらんと婚姻をとの  
んとやうる侍従の年月をゆゑて又母よ廻りあつる  
娘くまふる紛くはうづれ此と並びうも又も思ひ  
よあがもほく又母の心よ背うとあへひ女のまちよ久

女の名ふうけまといとされば父母の心よそむくまうさ一よ  
に一世の契の名うよ陰きよふあれば父母よア様おまみの  
時もあれよのうせ不孝よあつて家をもとばりつまくば  
家よおめらあくはくはまくせゐにすと頼むふりばく  
もさあとあれども失みくひ女のまちもくすとふ我おと  
きの及びくよきよき筆とこうとれが若も公のまく内  
一日もまくよきよきよき筆とせんじを継よ老くるりの人の筆  
の筆うあくとがくくよやなればかふよびく人も口トとく  
ひよいよくん人とほほへしものうやまくよあくくわと  
人よみくドリのをもとおりひ定めしとくわとよいよ

を又母のめへ能ウトやうくある處を極めりる  
かくく佐野へ便ふをして、はと定後後の方をやう  
ふもとそろそろ其日よりあらわふ侍従のうな生ま  
すれがは樂るものざるをくよとあるのせう生ま  
出よ多たと姫と秋とすりり年少ふ伯くちく算君  
きのりのものは有ととありをあつはまく舞さ  
み不候とぞく遙とぞく心をのづくとゆうる  
ゆううう村女三般のむくよれゆく敵々くく  
行候よもやをと彼は敵あれとくくくくめにあつ  
よもれのうけようさーのむくみふくくとくく

あふれてくらをふる家とみんらうもゆく  
喜びのと成ふりひ出うてぬへ軒を拂桂枝の香  
めじまくと時々も柔もりとくと見うとくと  
なうぞやうほへりうざうめひとと云ひはぐく居うとくと  
よ度数へ與とうとすられへ真渡うて信吾れ體式とく  
しくもとくとくの男を追退した女人勢とて  
入れるがふあやうふうへらへ女房入勢あつて輿  
ようすをあかへれよとひ六十半と三重の老女を  
まくまくやうふううううはあへはひくらせうを  
君のいとくかへをゆるの思ひの中よとせすへうる

風情のやうなとおりひどく、おのむすびてまわらば寝殿  
立派よ立ちあく名がほのかう、跨の裾をもひそへせよ  
まくまくまくまくとよしく、足れり急にまくへとあまくあざく  
あえぎあうとまくとまくがる寂きのほゆともさへねどもいを  
う敵をくまくまくがたつぬれぬをまかのまくくまくもと  
やまんとじひく、ぬぬふあまくまくひゆもとくがくくと  
まくとまくまく心斗とまくまくまくまくと  
も首尾よくまくまく、鶴のあまくねとあまくとくの圍み  
すくもけじゆの敵くを語くまくまくまくまくと  
木の木の木の木の木をもあみゆふあきさくともまくとまくとまく

月夜の庵へあひてゐる娘へまへ様うくん實作ちりよ  
佛よりも主と称ふどかにびりあれのへせふありとたを  
あらもすと想ひたると相も體も體男姑おとこ侍従じゆううりれ  
莊いわふくみやくふ美うつくし容うめのうあたとよろづよ參さんへ婦曲ふきく  
足あし一いつねあへ國くに事こととせよめうれはあらそれよとせ  
うねううきううとあのかのめあはれ今いまを淋しづ小こ月つきの顛ひん  
毛けうそと安やすい心こころとせよれくむりすすりうらぶ音侍おと従じゆう  
養くわまれ育いくてられ一いつ清水きよみずの里さとに桑くわり家いえとよも  
恩おん城じゆうまされ遁とおよ宵よ夕ゆふふーもあら休やすだう憩くわ  
りまともよあらんとがへふよめぐらうる縁えんとよつてよ

そ不思ひあれ久間の二事行氣へ勧め同母兼う  
月と首文乃心よ宵ま勤氣をうけく後邊の國へまく  
ひの身とみうそいわしら成は侍従うありたもむに  
きあく役立くも人穎安へくあひてうむとうへとぞれ  
ハ現至乃叔父めいあがらきあもとくかがくと  
名へ絶會よあくひきくまへあきはへりの金をと  
あきへと失をくぬくへとひそ甚をよひとあまれまく  
しれ行兼う旨よとくとも妻のとくやへと絶せども  
にふの時う十にふまとも食ひ育られ一恩あさが  
らじてふあれめ房海へてうるー多特更のとあきへ

双林文の亡靈ふくとほりくやそ勤氣をやあくあく  
おもむくと收て旧里ふえう公私ゆうたをと若心よえくう足乃力  
よもあううととを嘗常う方うつむ裏幕へ假名をと  
小平とうあるととんづあううとんをうくととんづあ  
め殿の室をあううれりよううぬうみをあうととーとね  
をゆく船色の報給をうらまむぎり五條の高太へと  
葛よめーくーかんも年う拂れくふこあひタクモ外浪  
浪うよる縉代の看よあそこ寢うう集う勤  
をうびみされへばうくあくのりのうと花へとお家の  
えをよろぞた家造してふ孫もんをすうもううくると

うらめり

享和二癸亥年

正月吉祥日

馬喰町二十日

若林重光衛門版

育後環草紙第五之卷

